

われもと臨時の佛事をはじめて請じける程に、布施はしたなく多く取てのぼるとて、日たけて出たりけるに、奈良坂にて山だち待まうけて、布施物みなうばひ取り、○中山だち共忽に悪心をあらためて歸伏せるけしきに成て、うばひ取所の物共、ことごとく返しあたへてけり、

〔源平盛衰記 四十二〕屋島合戦附玉蟲立扇與一射扇事

伊勢國鈴鹿關ニテ朝夕山立シテ、○伊勢年貢正稅追落、在々所々ニ打入、殺賊強盜シテ、妻子ヲ養トコソ聞、其ハ有シ事ナレバ、諍所ナシト云、○下

〔新編追加 雜務〕一鈴鹿山并大江山惡賊事、爲近邊地頭之沙汰、可令相鎮也、若難停止者、改補其仁、可有靜謐計也、以此趣相觸便宜地頭等、可被申散狀者、依仰執達如件、

延應元年七月廿六日

前武藏守 泰時 判

修理權大夫 時房 判

相模守殿

越後守殿 ○又見侍所沙汰篇

〔事實文編拾遺 六〕高山彥九郎傳

杉山仙太郎

高山正之、字仲繩、稱彥九郎、上野新田郡細谷村人也、○中天明季年、京師災、正之聞之、晝夜兼行、馳而

赴京、夜過木曾山中、有賊數人、拔刀欲脅正之、正之瞋目叱曰、汝不知上野高山彥九郎乎、今聞天闕有災、馳而赴之、汝輩豈汚我刃乎、賊皆懼伏、後巨賊繫大坂獄、自語、平昔未嘗有恐怖、嘗在木曾山中、要人為劫、遇一丈夫、瞋目叱我、憶之、今猶股栗也、彼自呼高山某、豈所謂天狗者乎、○下

海賊

〔倭名類聚抄 二 盜〕海賊 後漢書云、海賊張伯路、寇略綠海九郡、

〔箋注倭名類聚抄 男一女〕後漢書九十卷、宋范曄撰、所引安帝紀文、按說文、賊、毀也、是殘賊字、以爲賊盜字者、轉注也、伊勢廣本正文海賊下、有海書如骸四字、疑似當作海音如骸、爲夾行分注也、